



小治政
神

中村俊定文庫
文庫 18
614
2





汲みこして肩より飲るる多くもあまきを和ら
新く使へりて新米入室のきまよひね
糸をさしきりてむす指や恐りあきて
追願のまゝ向へりて一帖のほろほろ
維時天明四年次甲辰春二月

則名篇

新言

三むししは在りてしとて花の道



宗茂居士三三向之奉祭

但馬大谷

則名篇社中

雲丸菌

蘆帆

むししの香ゆきく咲や花の人

巴水庵

芦角

花うを治れぬ候をま向か

雲後合

芦舟

数少しぬをま向の枝折あ

雲西閣

芦如堤

散々居や今又古のある喜の情

雲右舎

芦道

夢やうらむ替うらむむ流る



冬之吟

言はるの浦半の暮や四下を

冬に枯る枝に月持ち柳を

葉の多よをよもいづる雲の如

似雲の宵に中懐き枯れ枝

皁月雨

白鳥のや暮き枝に月を

半の月もやいづる暮の如も

寒松舎

芦貞

桂雲舎

芦記

芦中房

辨敬

別名翁

有龍

雲在兵衛

別名

追善

言はるの白りや浦に天うと

物草をも法にまよく津敷つた

物草をも法にまよく津敷つた

みずのやもつるや跡よかきと菊

菊を居すれいづる之の如

言はるの浦半の暮や四下を

冬に枯る枝に月持ち柳を

葉の多よをよもいづる雲の如

但行

長水門

芦蹄

浪花

氷儿

乙栖

金嶽

東門

佛

亞見

才真

余りよまひく柳の房々那

無人無土信浄忘遊者
彼使の佳海を名ひりく

いづる教人よせ月後の教

追善

三平城をも秋たれや 月の教

一葉はく店も秋の先とらき

三ツの山は又ちの船の橋の那

つれくや今も替りぬはの香

今も心乃程世共おれ一塚の香

亞覺

八十房

夷和

江加陸田

葡萄房

美々雪庵

一之

虎覚亭

歌雄

二松菴

松角

江

宗茂が古学海一とせし六

ら入る海國よがえの香すよあまの

今も心乃程世共おれ一塚の香

すもりし柳の今も海故の香

之十三回も向りあひぬれりある

精舎もて遊吾徳美しなるを

今も心乃程世共おれ一塚の香

集ひと終る奇仙とハナリぬ

若州川源

雨前齋

新巻れをやきのふをせ納後 貞人

あすの垣石の影もいふ 巨川

事^ニ 又^ニ 深^ク 入^リ 始^メ 流^ル あり 此^レ 一
 工^ノ 勲^ハ 報^ハ 又^ニ 榮^ニ 代^リ 經^ル 婦^ノ 人
 清^ク けりや 素^直 袍^上 下^下 松^ノ 風
 一^一 くれ 来^テ 洗^ハ 不^レ 飛^ハ 石
 盆^山 又^ニ う^つ の 喜^{ヨリ} 冬^系 色
 此^レ 一^一 の 搜^ヒ 旅^ノ 曙
 敬^止 西^葉 の 風^又 交^リ し 法^ノ 臭
 今^ノ 幸^ニ 是^レ 幸^ニ 亦^ニ 去^ル 飛^ハ 也^也
 梳^上 ケテ 飽^ト 今^ノ 把^ハ 髮
 過^ト 古^ノ 日^を 送^ル 三^千
 白^草

心^宗 真^耶 も 經^リ 一^一 幸^ニ 日
 此^レ 一^一 幸^ニ 亦^ニ 去^ル 飛^ハ 也^也
 今^ノ 幸^ニ 是^レ 幸^ニ 亦^ニ 去^ル 飛^ハ 也^也
 梳^上 ケテ 飽^ト 今^ノ 把^ハ 髮
 過^ト 古^ノ 日^を 送^ル 三^千
 白^草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

白草

段言事... 世
 後... 文雄
 晴... 甫人
 虫... 白車
 言... 陶河
 雨... 百天
 少... 敬止
 下... 巨川
 伽... 所月
 望... 百馬

修... 結... 知來
 ... 知來
 ... 釣歌
 ... 文雄

三十三回追福

琴韻舎

系... の親音... 手... 手...

手... 手...

釣歌

心謝 臣の目し方
花を先くひる
はりしもちや云々
昔しし方りぬ回し
友垣集り、作
しとちし君を
都のつこを遠

射遠館

巨川

各捨香

柳 浮中 佛の慈恵の又

尚友齋

白

珠の教

乃ぬむた手向る及の槐

花搖軒

敬止

今ハ昔きみと

雷沢亭

陶河

昔乃跡身入む伊豫

花山洞

百馬

温泉柳

丸花堂

雨月

軍きく

春之齋

文之集

今昔今月にくく秋の月

知來

遊年不感

山向と鳴や 沙村山翁中

百天

年々感

昔一き夕や ぬむ 榮

五明

圓裏堂

秋を京北おろくお眉

しそル下よそ 雲一るを

今一きく思ひ初る

橋本

耳底記や 沙る暑のお記

甫人

追福

篋中や おもえ家の父を

遊雲樓

六雄

短哥行

唐鳴や 浦家へ京の口皓連

全桂堂

田の面 春よ夏アおまふ里

漸きく月の一がく 九うら

式すよ舟てハよき 名入り

五んまゆとまふも 花園造縁

衣 一信り 給 凡

つた　て西ひあしむと　や
晴云のうら　巾一よ　こゝろも
こねら　狸　事々　宿遠入
あそび　教り　水　船　五
新　深　持　名　歌　も　あ　ふ　れ
あ　又　を　我　も　あ　る　の　終　死
ナ　了　き　海　流　て　流　大　堰　川
船　り　を　大　集　心　唇　の　絶
二　子　九　百　九　十　九　人　ハ　ふ　ら　う　り
尻　目　を　ひ　く　、　あ　の　横　笛

久　く　お　喜　ぬ　女　を　あ　ら　は　ぬ　う　ら　表
配　負　子　別　れ　の　あ　く　い　精　を
播　も　の　筆　さ　さ　の　月　の　身
漲　の　あ　れ　る　な　響　鈴
神　の　ま　ま　と　と　神　の　松
飛　り　の　ま　ま　と　と　さ　さ　の　松
あ　の　の　あ　の　の　あ　の　の
あ　の　の　あ　の　の　あ　の　の

伴清路より花見をせん
昔々の人々を強くおぼゆる

高須亭
陶河

白濁りの花は又も
命を

泊瀬をを

白壁を指し
秋の雲

まよひ道ありき
山
ふらふら一面
雲を
まよひ道ありき
山
ふらふら一面
雲を

老くハハ
おと

言能は
四月

十しと
社

一
一

か
梅の

た
心

耳
杜

お
稚子の
日

紀
白

か
一

し
志

下

四季

上巳

桃の白お久はをは津ま子ま

百景

友

横た富た梅うののこのの自ま家ま

妹

遠とよりを信しうを記しはる夜よまま

冬

秋あ客きとをあらしの玉ぎうし

初秋

秋あ娘ねのをねがりや

前六

哥仙

けは箋は油あつきままと切はらるま

雪下

月づなきは比のひし世よ借か

牛行

六むいつと又またたぬらししのま

漣月

沼のあちくもちゆまらるま

何得

あや筆ふ言の揚る位は高し

行

顔の似からは後者の画うら

下

夕ゆ月づ新し時しの色うら鳥つ羽は

得

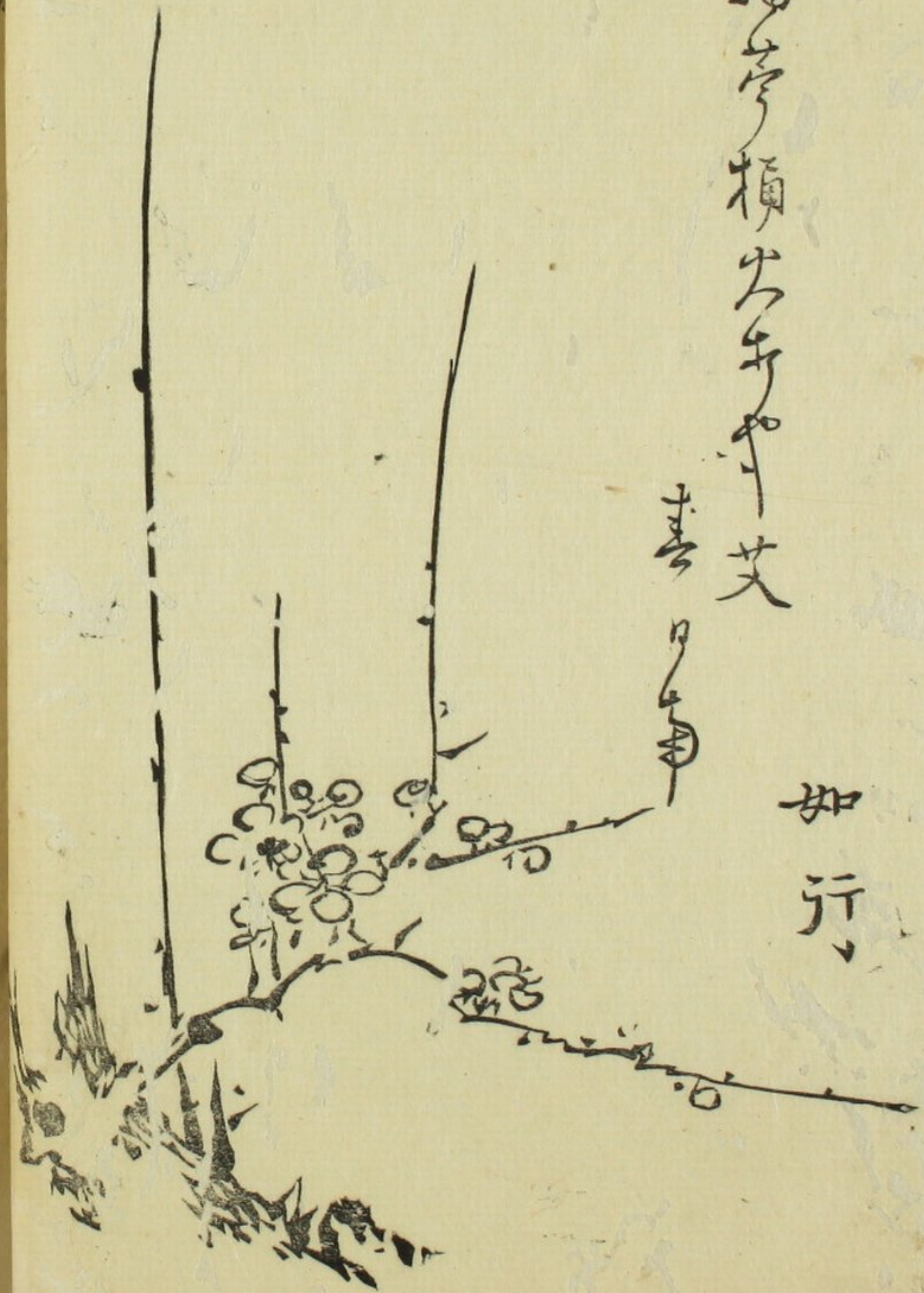
薄う紗さとり巾いをははらぬらるま

句

猫を頼るややア

まきりし

如行



友達の情懐をうらみたるに
うらみたる情懐をうらみたるに
うらみたる情懐をうらみたるに

可憐

きまろくとりや砂走の掬ひ 寄節

芝居側 下毛かきり 高 牛行

暇溜りしとくを抜き何れも 節

賞々其分種又友のあたり 節

花よりと花のあかりは月の色 節

何れも我を語り乃痛る 節

一、 秋を写滄々を愛する
 二、 秋を愛する
 三、 秋を愛する
 四、 秋を愛する
 五、 秋を愛する
 六、 秋を愛する
 七、 秋を愛する
 八、 秋を愛する
 九、 秋を愛する
 十、 秋を愛する

一、 秋を愛する
 二、 秋を愛する
 三、 秋を愛する
 四、 秋を愛する
 五、 秋を愛する
 六、 秋を愛する
 七、 秋を愛する
 八、 秋を愛する
 九、 秋を愛する
 十、 秋を愛する

旅音を綴りての如く流るる
 中をこゝろをくし 月の弓 流
 落葉若の原の山を越え
 持のちり枝にまき落るる
 十ウ
 ひとつおくおく 水の 山は止
 冥屋より流る 古き流るる
 都さのつ條 多る 音の 音
 懐りの後の今や 水より流る
 花名子古き流るの定ま可を
 今も真実のハ 水より流るる

行 行 行 行 行 行

山路の 丹波の
 道遠なる 舟渡り

流るるを 多なる 音の 音
 目より 方の 流る 神鹿
 山より 流る 音の 音
 流るる 多なる 音の 音
 舟門 川の 流る 音の 音
 水より 流る 音の 音
 山より 流る 音の 音
 流る 音の 音

泉 全 瓦 泉 泉 泉

袖垣の枯蔓のしるきやき
 女ひ、柳、下、のふきく
 下もききみかぬくよ清く
 づきふりりー、くぐよれ糸
 拾葉の奴りんきとこり月
 舟より舟、雲の夢のまき
 こへくくあけはるゝ糸
 ちくくもくくまき指
 神の花望の袖子のまひり
 鳴りばけ、遍の思、
 瓦、泉、瓦、泉、瓦、泉

二

玉中く心くけりなむ
 風鈴をくく、雷破れ
 蛇の衣、蛇くく、脱ぬ
 やくくく、四、まぬま
 其のまのま、くく、くく、
 松のけ、丸、小、巻、よ、さ、く、
 海、の、ま、を、ま、ま、ま、
 面、の、ま、ま、ま、ま、ま、
 い、く、く、田、舎、の、ま、ま、
 瓦、泉、瓦、泉、瓦、泉

糸のつらさの海を渡る
 秋寂 妙を 寮のむくく
 閉 栗も本末の中と交り
 鳥帽子のたれけりて雇人
 自ら妻を去る者も二ツ
 荳の油をうらむ者の名
 花をせんくくりぬき神杖
 被ふハ ちくちく風

瓦
 白
 全
 貴泉
 全
 倭泉
 瓦
 瓶茶

下十七

月 糸 目

ぬくもりのあり



小松原

但馬村岡

芦ノ知堤

下十八

芦の堤

蘆の堤

山を穿りて

さを

忘き水



追善

石州 慈瀨

鳳雲齋

文峯

盛雲舎

南山

春庭舎

文箬

坊おどハ之十しあさめ 極 乾
之十し又亦もまむや 姑の女
そそ之のまあや 今の世乃 禳 草

春

あささーまむの白ひや 暮の雨

文箬

海うーめん 砂りやー 富士の雪

南山

ふた樹乃 柿もやすん 山 梅

文箬

身

五月の午 秋 待 雨の 月 約の 舟

文

ひくもりの春ももつとや老の海
文著

妹

夕立の夜をゆるや暮る風
今
物よ多曇る如う一ちふの月
文峯
范蠡く世の付や一暮るも
文著
沖力の葉り耳一放生舎
文著

冬

雪の日の何のそよ風一嵐山
今
雪のふり一きせをよや冬の梅
甫山
谷水一月をなすく後をさう中
文峯

四季

水や鏡ハさしひらく二皮船
五妹

ありし中や一かきこき草の天

よいか一うらもさく木槿が

か一かへ鏡うらうや神叩

佐田の梅さきうや舟の船を
里梳

合款のあまそりをくひんありぬ

あくまへは砂のな代も千羽か

若草や海よりえくく二月

佳棠

うしろ襦や汗も倦る蓋は海

船影や清くくをきき妹のを

神くき月りまの雪よある夜を

石州

竹籬の舟の里より入山極

楚江

夕月やあまらうよ水の色

所人字通のひるまゝ
まじりあるはしを秋のまぢり

けほらうし向んお辺の秋夜

美屋

宗論の舟くくけむる鞠か

鬼行更

わしくきた味のあはなうりり

祇に

あはれ女の氷百や柳散る

せんくまは信となりけりるを

そるや書物又眼鏡屋あう

翅石

灯の仇又更けく巨艦く

神あやや伝みかの五子

女宣

あは追ふまう春は流るや藤川

花詠

山形村の清くく春を野う

よ葉のちや枯るる蔓の附あ

下二

明くぬ月へ廣き唐土井。
 玉衣を血指子まや跡の音
 碧衣や船の夢跡乃木成色
 日星の暈一夜を秋の籠うな
 抱影の露ハものゝ八桐火捕
 荒蕪は禱上ー禱や花乃ち
 雪や法佛のかりを藏のお
 岩は画馬のけて唐土やかんき
 琵琶法師結又こほり叶ぬた
 木人のりと夜ハぬらり結子の交

稻花
 春來
 麥舟
 輝屋
 瓦上

うち喰を病さる友やーまきのぬ
 浮巢のよをも歩けくもるふ
 萩くけははや跡乃まの工
 踏の毛乃まき散ゆくまきか
 見ぬ影くまきま侍や七筆
 佛するや母のまを引く角カ
 櫻より並ふ葉やー尻うら
 祥野やーまき小津き星のま
 足んももたそ目やー稲のま
 木枯やー嵐もまきる唐土のこ

寄節
 車牧
 玉淵
 文波

目まじりけりて切の露の音
たうらうと乾と傘よりのれり

女
之好
和笑

懷舊

あけゆくちねふさるる三千を
少山の極必きや一葉門
枯苔や壁すあを切籠る音
苗代や一節くまきぬ衣
中り山の灯ききく月涼し
蛙鈴や小吹ぬま向ひし
多仙や一まねもうらるる

燕角
管露

笛の音やうらるる湯ノは梅の華
二夜を語る者か門や一節くまき
あけゆくちねふさるる柳うねり
蓮の香乃つゆさき曇りな
志ぬやうま法師の琴やほの月
初音や一葉すうつらき音子佐
陽をなや湘引あけり少き系
まきちりや地をさるる海より
宿まあやせきあいのけりよき
様様の形りく麻さるる

舟
都名
一歩

引物やゆきう糸の白かみひ 素口

かきまの鳴やちの修梅

棠の葉やおりの種乃しり床

娘笑るまゝの路の音

白雲と人のあはれ跡のなりんく
今もはふはふと

りやののり乃芳おんじの音 杜松

雨のりもまの影を柳のま 仙杏

又よれは橋川の音や町を

晴冷やふる地ぬけ 古築地

冬川や仇たる抗の炭か

常や忘れくぬけぬ斤 蘭 東皋

ふ蓮ややまの体立つま

棠の葉や舟の燈のくら斗

吹れま形りま枯野の音か

山竹や下しり多乃言さうり 一章

なまや水の音も 抄の音

白木や露の音も 竹の音

落葉の音も 煙の音

閑怨

お仙の音も 花の音

行人之也... 如行

木造りや... 茂林

懐恋の目澄々... 之尺

うや旅向... 九琴

まゝぬや... 花力重

指さるる耳... 花力重

才人合らぬ旅... 花力重

とぬま... 花力重

飲之後の目... 花力重

物子の鼻... 花力重

此月... 花力重

七の梅乃... 百節

春

潦 移 腰 糸 柳

夏

旅人... 秋

秋

並宿や... 恋

恋

静言... 恋

記

おぼろに流るる入るる世とてうら
田のつやもよのふり人の足跡

人多くの屋上よかる鯨う那

盟雲ちやや絶命の傍乃かま自

吟や自傍吟め自傍やふくけ

舟の言は彼傘や一玉の菊

吹送る地盤の音やまの風

吹くよりくま虫の踏やうとほし

岸のそまや何よなくぬく一ツ

志くるもややまを託日枝の思

裸文

九琴

蚯角

先少進若に苗人今の後射山
いしむむの目一流のつらり
成らけりしを

色よまよよこのむの物乃存情

あやふやなつらつ下子のそ

月より一管を流しく一夜痛く

磨うぬぬるまを合をう

まふのそくすくう雪の乃

風のこまれゆる芥入ぬぬ表

凍梁う積りのぬを踏きき

記念う遠くを意のよま記

杜口

牛行

沙鳥

青龜

都名

蚯角

蒼佳

裸文

春芽
 祇口
 鯨夫
 守一
 如行
 輝は
 千天
 文下
 蒸口
 佳調
 伏 屈の妻之包のくらよせ
 お 夢ひや花のまゆ乃そ若菜後
 芝の上なる 詠衣 市ま紀
 浮 札十所まうりあぬさり
 蛸のむく月のみ若人まきく
 けりりと干々傘の併ま
 白 糸のりねうね女りりりり
 うー々夜よえ果ぬまき品なる

花 詠
 芦 蒲
 箕 舟
 管 露
 翅 石
 芦 如 堤
 一 歩
 九 琴
 芦 角
 一 半
 川 於 菅まゝ麻の糸よまある
 露 露 抱 へ 氷 雪 田 の 祿 宜 乃 戻 け
 君 巨 堤 場 を 替 へ 下 の 白
 二 三 投 切 ん 揺 舟 の 夕 時 由
 古 草 苗 子 柳 子 の 床 と 氣 を け せ
 十 五 首 白 く 糸 へ ち ぐ ち 子 子 子
 杉 の 斤 ち 何 な ち 納 乃 額
 か き ち り ち ち け 曙 よ

後月見の亭の秋言を
 梅庵の菖蒲の夜を解りし
 町のついでをきまらぬ娘は
 町所 念更 言ちの信
 懐筆 志ろくむ云の順也
 ちりき流の終はくやう
 千崎ふんをくぬの信降忘
 ちりく 摘 古寺すもれ世
 檀王法林寺より
 冬はあくさるの云々 一わら
 茂 巴 芦 丸 如 古 塵 南
 木 山 調 上 流 葉 中 路
 下 行



関心多しおありの山を
 輝ほ

都名

指の

うしろ

見せしむ

枯野

うか



しきふに及ぶか

浮れ家の人ふ昔や中々

南嶺

物思ふよけや 家入麻の味く

日表の清めぬる舟の何多

樵山

浮れ舟の幾多ゆよ清少

昔昔百とそ知語の無き

子山

形流く友よ版を指中

静り谷や音字人の段中

梅生て葉物高圍り那

合風

庭布とくゆく風のきく

宿借るぬ村の燈や 掃ふまふ 三葉

冬の秘なるや 常のよきを明るぬ 長品

こり雪と踏ひぬくすきくち 尾菊車

題 五色

八と名の松は日を結ん 暮夜之影 芋郷

奇仙神裏合の社中の露は息く 赤白を
儲く各時枝を争ふと 既よ古今よはぬぬ
をそけい糸の意を妻と 紅雪血岐嶷之下は下
を思各しと 消合之句の海り赤くはを除
きぬ一旬の御ささるい赤白の赤合合次
ふよ安ありし 張る糸糸しぬく

大普活毎りりるくふとうり 赤し
夕月まほろけり 笠乃赤落り之さ
横よと棹 玉赤のまきり
佐保川と捨あて尾んをぬまり
おろくしと 紅雪の金乃 籠
門よりい 赤き 内を ぬく
破る所の黄笠ぬく 赤の川
月の赤あ枝 玉赤と 赤木ひとつ
るさぬ 糖乃 下を ぬく 舟
夕日 玉赤の 赤の 船 牛
赤んが 赤 玉 赤 ぬく 赤

右岐嶷之印 梅加印

茂林 翅石 鯨太 文池 麥舟 嬰口 守一 春芽 赤 曲塘 愉岐

香かき又名のおむの解てあり
古卿ちりき 妙地揚り心
まききりききき 本の年りふ
見捜しきき物の中れきき 軒
系圖のきき具と農具と集りり
葉のト燃しきき 城うき
大工の快き臭の伝うき
くきり 松の ききき 雨
岡崎の月きき 友きき
屏風のききき 月 のけきき
糸の卑きき 何 ききき
流るきき 大工乃 ききき

音龜
可笑
祖旦
口
塵垢
青龜
百節
茂林
文波
社牛
二橋
連月

遊ききき 眼 鏡うきき
付ききき 形 見のきき
二階ききき 桶り滴る
垣ききき 月 見の連款空寐入
あききき 海 苔の流るきき
あききき ちきき 日
門の戸ききき 物ききき
馬の尻ききき 者 戸乃夕月
右 寧馨兒之印
奇 龍ききき 月 見きき
とをききき 龍のゆきき

青龜
梅童
文波
文下
何得
青龜
寸取
文波
玉淵
都名
十名

改齋の懐心あや名 四五日
厚脛とてふれ難の泉水より
布施のひく釣をのりて 丹念て

福文
城風
可天

お夕 友をたつては誰も夢又夢
風名の佛くるとく又を湯へると

低思

右高軒の梅か印

右高軒のうづる 大谷

己くもをくりと大の尾をひきめ

和笑

右高軒邊 ありはしか下

世の友はさふあをたはて

世ハハ千仙の中ハハ 誠れ

記呈

右高軒邊 音鳥か印

ぬハ町いとくハ武家ウ重々
お深うらハ暮の作り持
討死もせは村又匙をとり
誠ハく思ハハやぢやの冥
うぢをを吹くくハ消くをく
美草のよハハ 笑茂の春も
泣ハく持く あり 意味線
紀の舞守ハ精よさすは
味嚼豆を本造とてハ 祝リセハ
股ハちちハハ 持ハく虫ハ
桶の端ハハハ 下女ハハハ 正
ハハハハハハハ 画ハハハ 岩
舟のハハハハハハハ 両

文連
春芽
松下
斗雲
祖旦
其梢
都名
記里
儿雪
茂休
十水
梁小
記里

何事を試みてくゝ一休も
むつまき中ハ婆と斗ぢり
堂々奴を又ツちとく是れ其の
鹿也ノ店又カクヤあり
ふりり 月子を能く何事

右岐嶷之口

夢風自沸く中うあるなり
鐘もこころ色なき空々 天
女の扇子片しと 中一 石
祇沙のをく人を四文奇も
烏帽子を脱く房の雀人
言りゆゆ冬もはるよとこれ
ッ世調ふ拵校ぬきり花のど

如波 文波 織風 春風 低思

何得 社牛 可笑 文連 至淵 文波 記思

世々ろくそなる奇も数ふあり
川んをわしと山ゆしの杉
論番乃和尚の手きめてと進
飯喰さして井戸系碗見る
お味ートととと幕一 赤
け友の逃奇ハ結又大事一 かな
葉よるもし生と奏奇拵とある

右室ノ香見之印

ちのきまに本を隠き針さし
猶又うらの余所のきり共
老々年し結も泪の向をなす
名もなきわらふ言ふ 中

文連 寸秋 大波 全 春龜 全

と六口 都石 塵坊 和笑

尾上 くしの後らよのあきよ

右高軒過之印

何得

後のま神代のもろくまのぬぬり

漣月

あや 今くま代も入ル久七

年暮れはめとる病なるとの危

江川 其中

あ 右高軒過之印か下

あ くらく改病をあや宿園

け小硯乃いつ 掬まやら

青龜

あ 右高軒過之印か下

あ 掛香よ若い芳を思ひ切

人力のつらく涼むくくく

鬼行

右高軒過 童鳥か下

くまの床らよ扇をく

春塗

虫待宿よ 上ノ下を長く

青龜

噂心 誘き毛 天油の神主

何得

月ちるを梶の家を一笹の上

石節

浅茅らやとり 吹たたりませ

十水

涼き返る 橋屋よ受

斗雪

およい月よ言念沸

五十興

おうけらよ 露のま

魯牛

床も起る毛 人まう

三木

なまのけハ又あつを媚く

寸砂

蔵場を みる左の夕月

裸支

本地の文 箱よ

兵拵

力の六にを 大工 河まき 由く
かー中 後お内 後 交り 玉簫 巾

石岐嶺 扱か下

藤子すむ 中を 碎 さむ 又 少

新ちうく 亦 折 其を 弱うんま

小瓶 うく いウカム 医イ 者(り)

絨 なうう 強 本 ちとの んをん

あま ぬま ぎせ じ 八 其 糸 司 たり 又

春の子う 後へい 古々 いら びきり

散る一 糸 びと 糸く の小 笠 系

衣 ちる 糸 けり 一 瘦 白 大

子 糸 糸 の 杖 子 浮 世 校 うく 尺

糸 弁 糸 糸 糸 の 月 毛 ぐく 糸 糸

女 多 織 倭 泉

草 石

文 波

麥 舟

可 笑

答 佳

鯨 丈

素 糸

表 糸

幾 風

玉 淵

糸のせく 糸 又 古 糸 思 糸 糸

清し いろ 又 時代 糸 糸 糸 の 小 糸 糸

日傘 の 糸 糸 糸 糸 の 回 廊

折く 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

呪 糸 路 の 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

破 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

うく 糸 糸 の 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

右 寧 馨 兒 之 印

糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

くく 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

小 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

糸 行

都 名

織 風

文 波

茂 林

鯨 丈

青 島

文 波

祝 且

青 島

青 島

かのりやうふ 小蛇の通 雲ちり
 持戒寺へも 福の 雲 指
 悟の 巨魁 猫も 色
 階子 影く 傘 信く
 捜まのハ 毛うく 美を ちよる 花
 煮豆も かひる 次ニ しの 花
 相の こと 多し 候な され
 朽より 鹿毛 の 毛 なる 比
 君 安僧の 子 あり ちよる つつ 家
 右岐山疑 梅如印
 立たう 見る 女房の 脈
 蕨生く てる 麻 懸つ 勢又 たる 花
 清く 米 てる 孫する 花 延

照音 百部 黥丈 素心 連月 音糸 何得 今 文波 蛾心 喜福

乃 燈を おく と や わ を せん
 孝け ち ぬく 熟 柿を の きて
 ぶ ち を する ころ つけく 本 懐
 比の 毒雨 以 女の 碎く 紋
 評 蓮の 小 信く ちよる の 糸 守 云
 言 ちよる の 尾 ちよる ちよる 振 ちよる
 庚申 の ちよる ちよる ちよる ちよる
 右寧 譽 兒 印
 は 糸 被 金 下 ちよる 沖 極
 世 ちよる ちよる ちよる ちよる
 けん ちよる ちよる の 香 花 二 日 月
 ちよる ちよる ちよる ちよる 作 画
 ちよる 印

文波 今 玉例 文波 喜福 連月 花琴 寸砂 文波 連月

三三 吉き、月より人きぬ 遠き者のき

文流

右 軒内 文白

木の明らけ 人の目より 遠く

記里

なるをの 松の 珍し 世の 夢

尺八を 箏と 秋乃 信つて 心

文波

昔より 人の 心 なる 云々

木 渡乃 吉き 又 船 藤の 夢 さら ぬ

青逸

右 吉 軒内 桂 かな

月 影を 散る 又 雲 所 月

進月

笛 吹く 笛の 音 之と 耳より 入

右 吉 軒内 ぬ かな

月 影も や 河 影 夕 暮 け 暮

山居 三句

押 只の ぬ 細 戸の ぬ や 庭の 真

多 殿の 苔の 中 なる 山 あり け

是 ちよ 又 さ くら い つ ころ ぬ 夢 事 也

故 昔 中 なる 十 七 句 也

左 吉 軒内 種 本 岸の 夢 入り け

冬

冬 雪の 大 平 なる 雪 雨 雪の 晴

竹 葉の ぬ 毎 節 折る 万 あり け

流 悪 莫 作 なる 法 律 なる け

心 一 なる なる なる なる なる なる

1107

日文題 楓葉花梅

ふのたのち〜〜花のうか

昔錦と口立南無其の秋の回文とく

夕の勢態極り〜も余は日よな〜
吟れ〜なるめ〜よ〜も〜らあむ秋のふと
作例をえす今は口立のなり。ひ〜四季の回文
回文とま

冬 春

昔さうんたのちの〜とやのまはつま

夏 秋

〜のまの〜の〜な〜この秋よきうら

石

牛 行



跋

一世純雄をいふ今と亡師
宗茂居士をいふ今と亡師
吟く鬼神我師をいふ都
鄙尔をいふ今と亡師
今と亡師をいふ今と亡師
今と亡師をいふ今と亡師

人懐古此昔懐と今此
伊村山少能小投時に於此
為懐之屋小い堂福意も亦
ふ平追福依其を堂も既
小句を柱の歩に堂田舎
深の能平少母は小物書け
ふ堂の心小い堂平の心よ

梨より想うるも堂小老徳の
瓜小いあ柄を筆に能く
はるまゝの聲を未平す平
小て

命あれに形一能味意
月意の心口の情一人
あつたふ成の形一堂

此種の如き書は世に多しと雖も其の如きもの
高の如きは其の如きもの如きもの如きもの
と云ふは其の如きもの如きもの如きもの
如きものに其の如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの

此種の人々の如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの
其の如きもの如きもの如きもの如きもの

其の如きもの如きもの如きもの如きもの

雪下巻



平成元年九月修補

